

タモギタケ

鮮黄色で大株立ちになるので奥日光では一番目立ち観察しやすいキノコです。成菌になると強い臭いにおびき寄せられた虫類が食べに来ますので、菌食性の動物を観察するには最適のキノコです。東北、北海道では、ハルニレを方言でタモと呼んでいますのでヤチダモと混同されているようです。

シカが生やした

栃木県奥日光のキノコ

横山 元



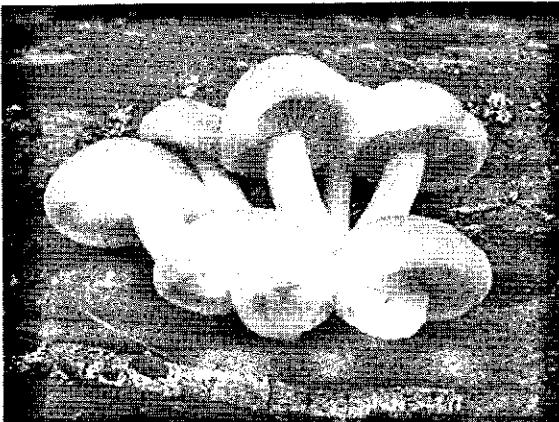
栃木県奥日光では早春から晩秋までキノコの観察ができます。平地では見られない樹木があり、ここでは北国に発生するキノコも普通に観察できます。最近の奥日光の樹木はシカの食害で、生々しい無惨な傷跡を見せつけています。シカはハルニレ、ヤチダモ、ミズナラ等の広葉樹、ササ類等を食い荒らしています。美味そうな広葉樹ならまだしも、まずそうな針葉樹のカラマツやウラジロモミの樹皮まで食べなくては生きられなくなっているのが現状です。食害され枯死を待つ樹木がそこらじゅうに見られ、目をおおいたくなるほどの傷跡をさらけだしています。管理する方も増え続けるシカに防護網や電気さくを設け対抗、保護していますが奥日光全体の食害をなくすことは程遠いようです。栃木県では県内のシカの個体数を調整することにし半成6年度は有害駆除によるものが1,000頭、狩猟捕獲で800頭、合計1,800頭、日光国立公園も含めて行い、現在も続けられています。その結果、

奥日光の食害も数年前からやや減りつつあります、まだまだ食害され続けています。早朝の西ノ湖周辺ではハイカーよりシカの数の方が多い時もあったほどです。下草も食いつくされ残っているのは山菜で知られるイケマ、ヨメナ、ハンゴンソウ等、シカが食べない植物が繁殖しています。シカが食べられる下草やササ類もなくなり樹木を食べずにいられなかったのでしょうか。またシカはハルニレの樹皮が大好物で軒並み食害しています。枯死したハルニレは危険なため伐採、そのまま自然に帰されています。ハイキングコースからも伐採されたハルニレ材に発生したキノコが観察できます。ハルニレは材質が硬いのと低温のため、木材腐朽菌がとりついで分解しにくいようです。シカの食害で枯死させられたハルニレ材に生える奥日光のキノコを紹介いたします。

参考文献　さらに詳しく知りたい人のために
松川 仁・キノコ方言原寸原色図譜 東京新聞出版局 1980年
辻岡幹夫・シカの食害から日光の森を守れるか 随想舎 1999年

ホシアンズタケ

初め北海道から報告されたキノコですが奥日光ではごく普通に発生、観察できます。枯死したハルニレ材に発生、カサの表面はしわ状の模様があり、柄には鮮やかな水滴をつけ、キノコマニアなら必ずこのキノコの美しさに魅了されることでしょう。奥日光でホシアンズタケが観察できるのはシカが大好物のハルニレを食害し、大量に枯死させたためです。



ヒカゲイタチタケ

ナヨタケ属のヒカゲイタチタケは青木実氏から1966年「日本のきのこ図版102」と、1992年「日本のきのこ図版1659」に発表されています。ムササビタケが巨大化したようなこのキノコはハルニレの倒木に発生していました。青木氏のヒカゲイタチタケは埼玉県所沢市の産地と記されていますので平地でも発生します。写真は佐野悦三氏書店から購入したスイスのキノコ図鑑4に掲載されました。



ニカラウロコタケ（浅井郁夫氏撮影）

原色日本新菌類図鑑には日本特産で一属一種で、初め北海道で発見されたが本州の亜高山地帯にも発生、外見はキクラゲ類を思わせるとあります。奥日光の平均気温は札幌と同じくらいで枯死したハルニレ材に北国のキノコ類が発生するのも当然のことと思っています。



オオシャグマタケ(幼菌)

カラマツ林の埋もれたハルニレ材に発生していましたが、ほかの朽ちた広葉樹材にも発生します。福島県田島町ではカラマツ林で埋もれたシイタケのホダギから大量に発生していました。シャグマアミガサタケに似ていますがオオシャグマタケはシトネタケ属のキノコです。奥日光での観察は5月下旬ごろが目安です。

